

# 序

中国地方の最高峰、霊峰大山の麓に広がる史跡<sup>むきばんだ</sup>妻木晩田遺跡は、弥生時代の集落の全体像やその変遷を知ることのできる貴重な遺跡です。その重要性に鑑みて、平成11年12月に約150ヘクタールに及ぶ範囲が国史跡として指定されました。

鳥取県は国史跡指定以降、妻木晩田遺跡に暮らした人々の生活を具体的に考えるために、平成12年度から発掘調査を継続的に行ない、その成果について報告書やシンポジウム、展示などで皆様に御紹介してきたところです。

本報告書は、平成29年度及び平成30年度に行った<sup>まつおがしら</sup>松尾頭地区の発掘調査報告です。松尾頭地区では、首長層の墓域である<sup>ふんきゅうぼぐん</sup>松尾頭墳丘墓群の様相解明を目指し、発掘調査を行いました。調査の結果、妻木晩田遺跡の墳丘墓群の変遷の中で詳細がわかっていなかった弥生時代終末期前半の墳丘墓である松尾頭3号墓～5号墓の3基を新たに発見しました。特に松尾頭3号墓の調査では、埋葬施設の基数や墳丘墓築造方法などを確認することができ、松尾頭墳丘墓群の実態解明だけでなく、集落における首長墓の移り変わりを考えるための多くの手がかりを得ることができました。このような調査、研究の積み重ねが、妻木晩田遺跡そして地域の歴史を解き明かしていく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査に多大な御理解と御協力をいただいた地元関係者の方々をはじめ、御指導、御助言を賜りました関係各位に心から感謝申し上げます。

令和2年3月

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所長 黒田 真



# 例言

- 1 本書は、平成 29 年度から 30 年度に、国庫補助金を受けて鳥取県立むきばんだ史跡公園が行った発掘調査（史跡妻木晩田遺跡第 33・34 次発掘調査、松尾頭 10 区）の記録である。
- 2 本発掘調査地は、鳥取県米子市淀江町福岡字小真石清水に所在する。
- 3 本書における方位、座標値は、国土座標系第 V 系（日本測地系）により、標高は海拔高で表す。
- 4 第 33 次発掘調査は安西工業株式会社に現地調査の支援を委託した。墳丘墓調査前及び 10 区調査後の地形測量、遺構図面作成、航空写真の撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の指示のもと、安西工業株式会社が行った。
- 5 第 34 次発掘調査における調査前の地形測量（基準点打設、水準測量含む）については、株式会社アイテックに委託して行った。
- 6 第 34 次発掘調査は国際文化財株式会社に現地調査の支援を委託した。調査後の地形測量、遺構図面作成、航空写真の撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の指示のもと、国際文化財株式会社が行った。
- 7 遺構の写真撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の文化財主事が行った。
- 8 調査で作成した図面の再編集、遺物の実測及び浄書は、鳥取県立むきばんだ史跡公園の文化財主事及び整理作業員が行った。
- 9 遺物の写真撮影は、鳥取県立むきばんだ史跡公園職員が行った。
- 10 本発掘調査の記録類及び出土資料は、鳥取県立むきばんだ史跡公園において保管している。
- 11 本発掘調査の成果については、鳥取県立むきばんだ史跡公園編 2018『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2017』及び同 2019『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2018』において概要を報告しているが、本書をもって正式な報告とする。
- 11 本書の執筆は第 V 章第 2～6 節と第 VI 章第 2 節を除き森藤が、第 VI 章第 2 節を高尾が行った。第 V 章第 2～6 節は、分析委託業者が執筆した原稿を論旨に影響しない範囲で語句の統一、編集を行なったうえで掲載した。
- 12 以下の諸機関には関連資料の調査及び実見でお世話になった。  
一般財団法人米子市文化事業団埋蔵文化財センター、江府町教育委員会、大山町観光課文化財室、鳥取県埋蔵文化財センター、南部町教育委員会、日南町教育委員会、湯梨浜町教育委員会、米子市経済部文化振興局文化振興課
- 13 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々から御指導、御助言をいただいた。記して感謝申し上げます（敬称略、所属・肩書きは当時）。  
河合忍（岡山県教育庁文化財保護課）、河合章行（鳥取県文化政策課）、高橋章司、水村直人（以上、鳥取県とっとり弥生の王国推進課）、渡邊貞幸（出雲弥生の森博物館名誉館長）

# 凡例

- 1 本報告における遺構番号のうち、墳丘墓については第1次発掘調査からの通し番号である。
- 2 遺物カード及び遺物の注記等に用いた本発掘調査の略号は、「33MG」、「34MG」である。数字は調査回数、MGは松尾頭地区の略号である。
- 3 遺物の取上番号は、調査回数に通し番号を付し、遺物カード等に記録している。
- 4 本報告書に使用した地図は、西伯郡大山町作成の地形測量図並びに米子市作成の都市計画基本図(1/2500)を縮小、合成し、加筆したものである。
- 5 本報告書に示した土層の土色は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』2005年度版に基づき、命名したものである。土中含有物の大きさについては、土層観察用哇の観察面で視認できるものの径を記した。
- 6 妻木晩田遺跡の調査における弥生時代の時期区分は、I期=前期、II~IV期=中期、V期=後期、VI期(畿内庄内式併行期)=終末期と表す。詳細は編年対照表を参照されたい。

編年対照表

松本他	清水	松井	辻	高尾	濱田	濱田	牧本	妻木晩田遺跡 時期区分		
2000	1992	1997	1999	2008	2009	2016	1999			
	I -1 様式					I		弥生時代前期	I	1
	I -2 様式				2					
	I -3 様式				3					
	II -1・2 様式				4					
	III -1 様式			III -1		II		弥生時代中期前葉	II	
	III -2 様式	西伯耆 I	III -1 期	III -2		III		弥生時代中期中葉	III	1
	III -3 様式	西伯耆 II	III -2 期	III -3	2					
1 期	IV -1 様式	西伯耆 III	IV -1a 期	IV -1		IV		弥生時代中期後葉	IV	3
2 期	IV -2 様式		IV -1b 期	IV -2 (古)・IV -2 (新)	1					
3 期	IV -3 様式	西伯耆 IV	IV -2 期							2
4 期	V -1 様式	西伯耆 V			1 期	V		弥生時代後期前葉	V	3
5 期			2 期	1						
6 期	V -2 様式	西伯耆 VI			3 期	VI		弥生時代後期中葉	VI	2
7・(8) 期			4 期	2						
(8)・9 期	V -3 様式	西伯耆 VII			5 期	VII		弥生時代後期後葉	VII	3
10 期			6 期	3						
11 期	VI -1 様式	西伯耆 VIII・IX			7 期	VIII		弥生時代終末期前半	VIII	1
12 期			8 期	1						
13 期	VI -2 様式	西伯耆 X			9 期	IX	天神川 I	弥生時代終末期後半	IX	2
		西伯耆 XI			10 期					1
		西伯耆 XII								

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社

松井 潔 1997 「東の土器、南の土器」『古代吉備』19、古代吉備研究会

辻 信広 1999 「弥生時代中期中～後葉の土器について」『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会

牧本哲雄 1999 「第1節 古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ園第6遺跡』(財)鳥取県教育文化財団

松本哲他 2000 「第4章 第1節 土器の分類と編年」『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅳ』大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会

高尾浩司 2008 「山陰地方東部における弥生時代中期の土器編年－大山山麓地域を中心に－」『地域・文化の考古学－下條信行先生退任記念論文集』下條信行先生退任記念事業会

濱田竜彦 2009 「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集 国立歴史民俗博物館

濱田竜彦 2016 「西伯耆地域」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』古代学研究会

史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書  
—第 33・34 次発掘調査、墳丘墓群総括報告—

目 次

序  
例言  
凡例

第 I 章	妻木晩田遺跡の位置と環境	(森藤)
第 1 節	妻木晩田遺跡の位置	1
第 2 節	地理的環境	1
第 3 節	歴史的環境	2
第 II 章	発掘調査に至る経緯	(森藤)
第 1 節	発掘調査の経緯	7
第 2 節	発掘調査の課題と計画	7
第 3 節	とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当）の記録	15
第 4 節	とっとり弥生の王国調査整備活用委員会・調査体制	17
第 III 章	発掘調査の方法と経過	(森藤)
第 1 節	名称と概念の整理	19
第 2 節	松尾頭墳丘墓群の調査概要	21
第 3 節	発掘調査区の設定	21
第 4 節	発掘調査の記録	23
第 5 節	発掘調査の経過	
	1. 第 28 次調査－平成 22 年度の調査、遺構発見の経緯－	24
	2. 第 33 次調査－平成 29 年度の調査－	26
	3. 第 34 次調査－平成 30 年度の調査－	27
第 IV 章	松尾頭墳丘墓群の発掘調査	(森藤)
第 1 節	調査前の状況	29
第 2 節	基本層序	29
第 3 節	松尾頭 3 号墓の調査	37
	1. 墳丘の調査	37
	2. 埋葬施設の調査	49
第 4 節	松尾頭 4 号墓・5 号墓の調査	52

第5節	その他の遺構の調査	55
第6節	出土遺物	65

## 第V章 自然科学分析の成果

第1節	自然科学分析の概要	(森藤) 75
第2節	第33次調査に伴う自然科学分析 (プラントオパール・花粉・微粒炭分析)	(株式会社パレオ・ラボ) 77
第3節	第33次調査に伴う自然科学分析 (放射性炭素年代測定)	(株式会社パレオ・ラボ AMS年代測定グループ) 85
第4節	第33次調査に伴う自然科学分析 (炭化材樹種同定)	(株式会社パレオ・ラボ) 92
第5節	第34次調査に伴う自然科学分析	(パリノ・サーヴェイ株式会社) 95
第6節	出土遺物付着赤色顔料分析	(株式会社パレオ・ラボ) 113
第7節	小結	(森藤) 116

## 第VI章 総括

第1節	妻木晩田遺跡における墳丘墓群の変遷と評価	(森藤) 117
第2節	妻木晩田遺跡における外来系土器の受容と地域間交流	(高尾) 141
第3節	まとめ	(森藤) 163

写真図版

報告書抄録

# 挿図目次

第 I 章		第 24 図	松尾頭 3 号墓調査平面図 ……………40
第 1 図	妻木晩田遺跡の位置……………1	第 25 図	松尾頭 3 号墓墳丘土層断面図 ……41 ~ 42
第 2 図	妻木晩田遺跡周辺の地形……………2	第 26 図	北側周溝遺物出土状況及び断面図 ……43
第 3 図	妻木晩田遺跡周辺の遺跡……………4	第 27 図	西側周溝遺物出土状況図及び立面図 ……44
第 II 章		第 28 図	西側周溝遺物出土状況微細図 ……45
第 4 図	妻木晩田遺跡調査区位置図……………11	第 29 図	東側周溝遺物分布図 ……46
第 III 章		第 30 図	南側周溝遺物分布図 ……47
第 5 図	墳丘墓の分類系統図……………19	第 31 図	南西部及び南東部陸橋部断面図 ……47
第 6 図	墳丘墓計測概念図……………20	第 32 図	墳丘分層概念図 ……49
第 7 図	松尾頭墳丘墓群調査区位置図……………22	第 33 図	墳頂部埋葬施設検出状況及び遺物分布図 ……………50
第 8 図	松尾頭墳丘墓群全体図……………22	第 34 図	トレンチ 2 遺構全体図 (松尾頭 4 号墓・ 5 号墓) ……53
第 9 図	マウンド状地形 A 調査状況 (第 28 次調査、 年報 2013 再掲)……………25	第 35 図	松尾頭 4 号墓・5 号墓周溝土層断面及び 遺物出土状況図……………54
第 10 図	マウンド状地形 A 出土遺物実測図 ……25	第 36 図	松尾頭 10 区北東部遺構全体図……………56
第 11 図	マウンド状地形 B (松尾頭 3 号墓) 内容 確認調査状況 (第 28 次調査) ……26	第 37 図	3403 遺構平面・土層断面図 ……57
第 12 図	マウンド状地形 C・D (松尾頭 4 号墓・ 5 号墓) 内容確認調査状況 (第 28 次調査 再掲) ……27	第 38 図	3407 遺構土層断面及び遺物分布図 ……58
第 13 図	第 33 次調査状況……………27	第 39 図	3404 遺構平面・土層断面図 ……59
第 14 図	第 34 次調査状況……………27	第 40 図	3405 遺構平面・土層断面図 ……60
第 15 図	第 34 次調査 T2 調査状況 ……28	第 41 図	3406 遺構平面・土層断面図 ……60
第 16 図	第 34 次調査現地説明会……………28	第 42 図	半裁ピット土層断面図 ……61
第 IV 章		第 43 図	マウンド状地形 E 地形測量図 ……62
第 17 図	松尾頭 10 区第 33・34 次調査前地形測量図 ……………30	第 44 図	トレンチ 1 平面・土層断面図 ……63
第 18 図	第 28・33・34 次調査範囲図……………31	第 45 図	松尾頭 10 区北東部遺物分布図……………64
第 19 図	10 区北東部基本層序断面図 (1) ……………33 ~ 34	第 46 図	松尾頭 3 号墓西側周溝出土遺物 ……66
第 20 図	10 区北東部基本層序断面図 (2) ……………35 ~ 36	第 47 図	松尾頭 3 号墓北・南側周溝、墳頂部 出土遺物……………67
第 21 図	松尾頭 10 区調査後地形測量図……………38	第 48 図	松尾頭 3 号墓出土遺物 ……68
第 22 図	松尾頭 3 号墓墳丘現況測量図 ……39	第 49 図	松尾頭 4 号墓・5 号墓出土遺物 ……69
第 23 図	松尾頭 3 号墓墳頂部調査前測量図 (周溝完掘後)……………39	第 50 図	3 号墓出土鉄器 ……69
		第 51 図	3301 落ち込み・3403 土坑・3405 溝 ・3407 遺構出土遺物……………70
		第 52 図	遺構外出土遺物 (1)……………71
		第 53 図	遺構外出土遺物 (2)……………73
		第 V 章	
		第 54 図	第 33 次調査分析試料採取位置……………75



第 55 図	第 34 次調査分析試料採取位置……………76	第 79 図	仙谷墳丘墓群全体図 …………… 120
第 56 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓 北 A 5）から産出した植物珪酸体……………79	第 80 図	仙谷 1～3・5 号墓 …………… 121
第 57 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓 北 A 5）から産出した花粉化石……………80	第 81 図	仙谷 4・6～9 号墓 …………… 122
第 58 図	検出微粒炭 ……………81	第 82 図	松尾頭墳丘墓群全体図 …………… 123
第 59 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓） における植物珪酸体分布図と微粒炭分布図…82	第 83 図	松尾頭 1～5 号墓 …………… 124
第 60 図	妻木晩田遺跡第 33 次調査（松尾頭 3 号墓） における花粉分布図……………83	第 84 図	妻木晩田遺跡における集落の変遷 …………… 128
第 61 図	試料写真と採取位置（1）……………86	第 85 図	埋葬施設築造過程 …………… 129
第 62 図	試料写真と採取位置（2）……………87	第 86 図	墳丘墓比較図（妻木晩田遺跡）…………… 130
第 63 図	暦年較正結果（1）……………88	第 87 図	埋葬施設（墓壙上端）規模比較図 （妻木晩田遺跡）…………… 130
第 64 図	暦年較正結果（2）……………89	第 88 図	埋葬施設軸と丘陵軸の関係 …………… 130
第 65 図	マルチプロット図（No. 159（PLD-35756） を除く）……………90	第 89 図	埋葬施設配置の変遷 …………… 131
第 66 図	妻木晩田遺跡出土炭化材の走査型電子 顕微鏡写真……………93	第 90 図	方形周溝墓にかかわる棺種と規模の比較 …… 132
第 67 図	分析試料 ……………96	第 91 図	方形周溝墓及び埋葬施設の形態分類 …… 133
第 68 図	放射性炭素年代測定試料 ……………97	第 92 図	弥生時代後期～終末期を中心とした 墳丘墓の分布 …………… 134
第 69 図	暦年較正結果 …………… 100	第 93 図	山陰地域における方形周溝墓 …………… 136
第 70 図	花粉化石・微粒炭写真 …………… 102	第 94 図	中国山地山間部の弥生時代墳丘墓 …………… 137
第 71 図	植物珪酸体写真 …………… 104	第 95 図	妻木晩田遺跡土器編年（1）…………… 144
第 72 図	植物珪酸体含量 …………… 105	第 96 図	妻木晩田遺跡土器編年（2） …………… 145
第 73 図	炭化材写真 …………… 106	第 97 図	妻木晩田遺跡土器編年（3）…………… 146
第 74 図	大型植物遺体（炭化種実）写真 …………… 107	第 98 図	妻木晩田遺跡土器編年（4）…………… 147
第 75 図	分析対象遺物の試料採取位置（a）及び 生物顕微鏡写真（b） …………… 114	第 99 図	妻木晩田遺跡出土外来系土器（1）…………… 150
第 76 図	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 …………… 115	第 100 図	妻木晩田遺跡出土外来系土器（2）…………… 152
第 VI 章			
第 77 図	妻木晩田遺跡全体図 …………… 117	第 101 図	妻木晩田遺跡における外来系土器の分布 …… 157
第 78 図	洞ノ原墳丘墓群 …………… 119	第 102 図	伯耆地域出土吉備系土器…………… 159
		第 103 図	主な外来系土器の受容と変遷…………… 160
		第 104 図	妻木晩田遺跡からみた地域間交流概念図 …… 166



# 挿表目次

第Ⅱ章		第12表	花粉分析・微粒炭分析結果	103
第1表	妻木晩田遺跡発掘調査年次計画	第13表	植物珪酸体含量	105
第2表	妻木晩田遺跡発掘調査一覧	第14表	炭化材観察・種実同定結果	107
	12～13	第15表	大型植物遺存体分析結果	108
第Ⅲ章		第16表	分析対象試料一覧	113
第3表	妻木晩田遺跡における墳丘墓の分類	第Ⅵ章		
	20	第17表	妻木晩田遺跡墳墓一覧	125
第Ⅴ章		第18表	妻木晩田遺跡弥生時代埋葬施設一覧	126
第4表	分析試料一覧	第19表	妻木晩田遺跡墳丘墓諸要素変遷表	131
第5表	試料1g当りのプラントオパール個数	第20表	中国地方における弥生時代後期～終末期の 方形周溝墓一覧表	134
第6表	試料の計量値と微粒炭数	第22表	妻木晩田遺跡出土外来系土器一覧表	155
第7表	産出花粉孢子一覧表	第23表	編年対照表	156
第8表	測定試料及び処理	第24表	遺構一覧表	166
第9表	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果			
第10表	樹種同定結果一覧			
第11表	放射性炭素年代測定結果			

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1	妻木晩田遺跡 松尾頭墳丘墓群全景 南東から	巻頭図版 5	松尾頭 3 号墓 調査終了状況 南西から
巻頭図版 2	1 松尾頭墳丘墓群遠景 北西から 2 松尾頭墳丘墓群 俯瞰 上が北西	巻頭図版 6	1 松尾頭 3 号墓 埋葬施設検出状況 南東から 2 松尾頭 4・5 号墓 周溝検出状況 (手前が 5 号墓) 南から
巻頭図版 3	1 松尾頭 3 号墓 周溝検出状況 南西から 2 松尾頭 3 号墓 周溝完掘状況 南から		
巻頭図版 4	松尾頭 3 号墓 周溝完掘状況 南西から		

# 写真図版目次

PL 1	1 松尾頭地区全景 北西から 2 松尾頭墳丘墓群遠景 北東から	PL 6	1 西側周溝 土層断面 南西から 2 東側周溝 土層断面 北東から 3 南東側陸橋部検出状況 北から
PL 2	1 松尾頭 3 号墓・4 号墓・5 号墓 俯瞰 (上が北西) 2 松尾頭 10 区北東部 調査区全景 俯瞰 (上が北西)	PL 7	1 北東側陸橋部検出状況 南西から 2 北西側陸橋部検出状況 南から 3 南西側陸橋部検出状況 北東から
PL 3	1 松尾頭 3 号墓 調査終了後全景 俯瞰 (上が北西) 2 松尾頭 4 号墓・5 号墓 調査終了後全景 俯瞰 (上が北西)	PL 8	1 西側周溝遺物出土状況① (周溝埋土 1 層 下面) 北から 2 西側周溝遺物出土状況② (周溝埋土 2 層 中) 俯瞰 (上が北東) 3 西側周溝遺物出土状況③ (周溝埋土 2 層 下面) 俯瞰 (上が北東)
松尾頭 3 号墓		PL 9	1 西側周溝遺物出土状況④ (周溝埋土 3 層 下面、周溝底面直上) 西から 2 北側周溝遺物出土状況 北東から 3 東側周溝鉄鍬出土状況 南から
PL 4	1 調査前状況 南から 2 周溝検出状況 東南から 3 周溝完掘削状況 東南から	PL10	1 墳頂部遺物出土状況① (第 33 次調査時点) 北から 2 墳頂部遺物出土状況② (第 34 次調査時
PL 5	1 周溝埋土から墳丘の層序 (東側周溝から墳丘) 東から 2 南側周溝 土層断面 西から 3 北側周溝 土層断面 東から		

- 点) 北東から
- 3 墳頂部トレンチ調査前 (17 土坑完掘) 状況 北東から
- PL11 1 調査終了後全景① 南西から  
2 埋葬施設検出状況 南東から
- PL12 1 調査終了後 全景② 南から  
2 第1埋葬施設検出状況 北東から  
3 第3埋葬施設検出状況 南西から
- PL13 1 墳頂部南東トレンチ 西側断面 (G - G') 南東から  
2 墳頂部南東トレンチ 北側断面 (H - H') 南西から  
3 周溝から墳丘中央の層序 東側断面 東から
- PL14 1 墳頂部東側トレンチ 南側土層断面 (D - D') 北東から  
2 墳頂部西側トレンチ 北側土層断面 (D - D') 南西から  
3 墳頂部トレンチ断面 断面交点西 西から
- PL15 1 墳頂部北側トレンチ 西側土層断面 (E - E') 南東から  
2 墳頂部南側トレンチ 東側断面 (E - E') 南西から  
3 墳頂部トレンチ断面 断面交点東 東から
- PL16 1 松尾頭 10 区南西部 調査前状況 東から  
2 松尾頭 10 区南西部 調査終了状況 東から

松尾頭 4 号墓・5 号墓

- PL17 1 トレンチ 2 調査前状況 南から  
2 トレンチ 2 表土除去状況 東から  
3 周溝及び墳丘検出状況 東から
- PL18 1 周溝及び墳丘検出状況 南から  
2 松尾頭 4 号墓 周構内遺物出土状況 北東から

- 3 松尾頭 5 号墓 周構内遺物出土状況 北東から
- PL19 1 確認用サブトレンチ 土層断面全体 南東から  
2 確認用サブトレンチ 土層断面 (4 号墓側) 南東から  
3 確認用サブトレンチ 土層断面 (5 号墓側) 東から
- PL20 1 松尾頭 10 区北東部 調査区東側調査終了 (遺構検出) 状況 西から  
2 松尾頭 10 区北東部 調査区東側調査終了 (遺構検出) 状況 南東から
- PL21 1 基本層序断面 A - A" 南西から  
2 基本層序断面 A" - A"' 南東から  
3 基本層序断面 C' - C"' 東から
- PL22 1 基本層序断面 B - B' 南から  
2 3404 遺構検出状況 南西から  
3 3407 遺構土層断面 南西から
- PL23 1 3403 遺構検出状況 俯瞰 (上が南東)  
2 3403 遺構調査終了状況 南西から  
3 3403 遺構土層断面 西から
- PL24 1 3406 遺構調査終了状況 南から  
2 3406 遺構確認用サブトレンチ 西側土層断面 (A - A') 南東から  
3 3406 遺構確認用サブトレンチ 北側土層断面 (B - B') 南西から
- PL25 1 松尾頭 10 区北東部 調査区東側遺構検出状況 俯瞰 (上が北西)  
2 P 1 土層断面 南東から  
3 P 2 土層断面 南東から  
4 P 3 土層断面 南東から  
5 P 4 土層断面 南東から
- PL26 1 マウンド状地形 E 調査前状況 北東から  
2 マウンド状地形 E 塹壕部清掃状況 北東から  
3 トレンチ 1 南側土層断面 北から

出土遺物

PL27	1	松尾頭3号墓 西側周溝・北側周溝出土遺物 (Po 1・2・4・8・17)	PL31	1	遺構外出土遺物 (Po61～73)
				2	遺構外出土遺物 (Po74～82)
PL28	1	松尾頭3号墓 西側周溝出土遺物 (Po 3・5～7・9～16)	PL32	1	松尾頭3号墓 東側周溝出土鉄鏃 (F 1)
	2	松尾頭3号墓 墳頂部・北側周溝・南側周溝出土遺物 (Po18～28)		2	松尾頭10区出土 石器 (S 1～6)
PL29	1	松尾頭3号墓 出土遺物 (Po30～41)		3	松尾頭1区 マウンド状地形 A 出土遺物 (a～f)
	2	松尾頭4号墓・5号墓 出土遺物 (Po42～46)		4	大山町加茂遺跡出土 外来系土器(搬入品)
PL30	1	3403 遺構・3405 遺構出土遺物 (Po47～51)		5	妻木山2区 SK-86 出土 外来系土器
	2	3407 遺構出土遺物 (Po53～60)		6	松尾頭1区 SI-20 出土 外来系土器

# 第I章 妻木晩田遺跡の位置と環境

## 第1節 妻木晩田遺跡の位置

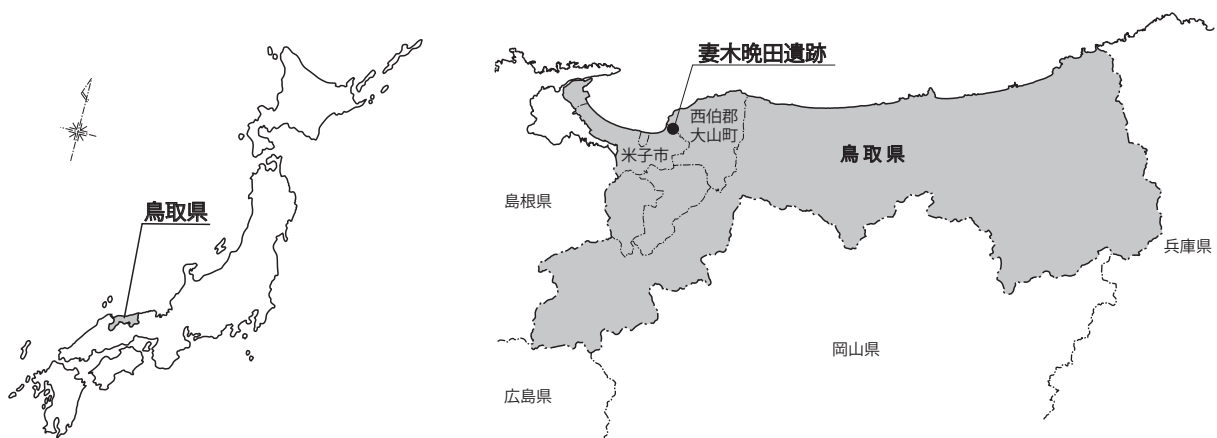
妻木晩田遺跡は、鳥取県西部、米子市（旧淀江町）および西伯郡大山町に所在する。遺跡は中国地方最高峰の大山（弥山、標高1,709 m）の北麓に位置し、大山火山の寄生火山である孝霊山（標高751 m）から北西方向に派生する通称「晩田山」丘陵上（標高90～180 m）に弥生時代後半期の大規模弥生集落が展開する。この「晩田山」丘陵の西側尾根筋に米子市と大山町の境界があり、行政区分においては、妻木晩田遺跡全体の約1割を米子市、残り約9割を大山町が占めている。

妻木晩田遺跡が立地する「晩田山」丘陵は、小起伏の丘陵性の山地である。その地形は、深い谷地形に分断された4つの丘陵に大別される。丘陵の尾根筋は北側3つが比較的広くなだらかであるのに対し、最も南側はやや急峻である。弥生集落は主に北側の3つの丘陵上に営まれるが、最盛期にあたる弥生時代後期後葉には集落の規模が拡大し、急峻な南側の丘陵上にも竪穴住居が建てられるようになる。妻木晩田遺跡では、これまでの発掘調査によって、竪穴住居が丘陵頂部縁辺の緩斜面に分布することがわかってきているが、斜面下方から谷部にかけての土地利用の様相は不明な点が多く、今後の調査で確認していく必要がある。

## 第2節 地理的環境

妻木晩田遺跡の南にそびえる大山火山は、東西約35km、南北約30kmにおよぶ広がりをもつ複成火山で、主に約100～40万年前の古期噴出物と約40万年前以降の活動による新期噴出物から成る。妻木晩田遺跡がある「晩田山」丘陵の地形は、大山火山の影響を大きく受けており、大山の古期噴出物である溝口凝灰角礫岩層を基盤とする。また、遺跡内では新期噴出物である松江軽石層の堆積も部分的に見られる。

「晩田山」丘陵北側の裾野には、大山火山から噴出した火砕流を基盤とするなだらかな台地が広がり、放射状に流れる河川の活動により裾野に扇状地が発達している。特に阿弥陀川は急流でたびたび氾濫して流れを変えたと見られ、多量の砂礫を流下し広大な扇状地を形成した。阿弥陀川の河口から淀江



第1図 妻木晩田遺跡の位置

町今津に至る海岸は、主に阿弥陀川によってもたらされた角閃石安山岩の円礫で占められ、海岸線の背後には海岸段丘が認められる。

「晩田山」丘陵北西側では、山裾に段丘地形が広がり、妻木川や天井川、宇田川により形成された小規模な扇状地が山際から張り出すように認められる。その下流では、西側の壺瓶山と北側の海浜部に発達した砂州との間に三角州が形成された。これが淀江平野である。この三角州はかつて存在した潟湖の痕跡でもある。気候の寒冷化が進み海退が始まった縄文時代終わり頃から弥生時代にかけて淀江平野には汽水域が形成され、その後、砂州の発達によって外海から閉ざされ湖沼化した。淀江平野のほぼ中央に位置する井手跨遺跡からは弥生時代後期～古墳時代の木製農具が出土



第2図 妻木晩田遺跡周辺の地形

しており、この頃、湖沼の周辺で水田が営まれていたことがうかがえる。淀江平野の湖沼は古代から中世にかけて規模が縮小し、近世にはほぼ消滅したと考えられている。現在、平野一帯に水田が営まれておりかつての湖沼の面影は失われているが、三角州と砂州の境界は JR 山陰本線に沿う高まりに痕跡を確認することができる。

### 第3節 歴史的環境

#### 旧石器時代

妻木晩田遺跡周辺の歴史は旧石器時代まで遡り、石器製作技術など多様なあり方を示している。鳥取県内で始良丹沢火山灰層以下で旧石器が確認されたのは、大山町にある門前第2遺跡（西畝地区）及び豊成叶林遺跡の2例である。門前第2遺跡では、始良丹沢火山灰層直下で黒曜石製のナイフ形石器や黒曜石剥片を含む石器群が確認されている。豊成叶林遺跡では石器ブロックが2ヶ所確認され、その周辺からは玉髓製のナイフ形石器、石刃、剥片のほか、黒曜石製のナイフ形石器も出土している。その他、近隣の遺跡からは、米子市淀江町の原畑遺跡から杉久保型ナイフ形石器、大山町小谷遺跡で国府型ナイフ形石器が出土している。妻木晩田遺跡洞ノ原地区でも、出土した黒曜石製の剥片石器のなかに縦長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器や打面を残置する一側縁加工のナイフ形石器などが少量確認できる。海に面した低丘陵という立地から、旧石器時代の生活痕跡が残されている可能性もあり、今後の調査で注意しておく必要がある。

#### 縄文時代

大山山麓では、サヌカイトや黒曜石を素材とした有舌尖頭器が出土されている。また、大山町南川遺跡では、後期の石組炉を伴う竪穴住居跡が確認されている。妻木晩田遺跡周辺では、旧淀江潟の縁辺に位置する米子市淀江町井手跨遺跡、福岡遺跡や、妻木川の扇状地に位置する大山町塚田遺跡、妻木法大神遺跡などから、縄文時代後晩期を中心とするまとまった量の遺物が出土している。これらの遺跡では居住に関わる遺構は確認されていないが、周辺の微高地や段丘上に集落跡が存在する可能性



がある。妻木晩田遺跡では落とし穴と考えられる土坑群も多数検出されており、稀に後晩期の土器を伴う。このことから、集落の狩猟採集の場として「晩田山」丘陵をはじめ近隣の丘陵が利用されていたことがうかがえる。

### 弥生時代

弥生時代には、おもに阿弥陀川の扇状地及び丘陵上、妻木川の扇状地、淀江平野、「晩田山」丘陵、佐陀川右岸の扇状地の5ヶ所を中心に遺跡が分布する。

前期後半から中期前葉にかけては、阿弥陀川左岸の扇状地にある上野遺跡群で土器が出土し、妻木川の扇状地に位置する妻木法大神遺跡では、自然河道から前期後半の土器が多量に出土している。この時期の居住域の具体的な様相は明らかになっていないが、妻木川と阿弥陀川流域の扇状地を生活の拠点としており、今津岸の上遺跡と大塚岩田遺跡において前期の環壕が確認されていることから、これらが当該期の集落の一部であることは間違いないだろう。

中期中葉から後葉になると、阿弥陀川左岸の扇状地において塚田遺跡に竪穴住居跡が確認できる。大道原遺跡や新田原遺跡などでも当該期の土器が出土していることから、遺跡の分布が扇状地高所側へ広がり始めたことが読み取れる。阿弥陀川右岸では、大山北麓のなだらかな台地上において、中期中葉から古墳時代にかけて茶畑遺跡群を中心に集落が営まれる。茶畑遺跡群では独立棟持柱を持つ大型掘立柱建物跡が検出され、この時期に祭祀空間を伴う大きな集落が形成されている点は特筆される。

妻木川左岸の扇状地では、晩田遺跡などで中期中葉から後葉の土器が認められ、遺跡の分布が「晩田山」西側裾野に広がり始める。中期中葉までは遺跡が確認できない大井川、宇田川の扇状地においても角田遺跡や日吉塚古墳盛土から中期後葉の土器が認められ、当該期に遺跡の分布域が拡大している。角田遺跡、日吉塚古墳盛土からはいずれも絵画土器が出土し、当地における祭祀空間を伴う集落の存在が示唆される。

一方、佐陀川右岸の扇状地においては、中期後葉から古墳時代にかけて百塚遺跡群を中心とした集落が営まれる。後期前葉には四隅突出型墳丘墓と環濠を伴う集落が尾高浅山遺跡に認められる。尾高浅山遺跡では後期中葉以降には台状墓が営まれ、墳丘墓の造営が継続されている。

妻木晩田遺跡では、中期中葉の土器を伴う土坑が洞ノ原地区西側丘陵で確認されている。ただし、竪穴住居跡は未検出であり、この頃に居住域として利用されていたのかどうかは判然としない。「晩田山」丘陵下には晩田遺跡があることから、山裾の段丘上が居住地であった可能性もある。

「晩田山」丘陵上に確実に居住域が形成されるのは中期後葉で、松尾頭地区で竪穴住居跡や貯蔵穴と推測される土坑などが確認される。他の地区では貯蔵穴や土坑が点在するのみであり、全体的に遺物の出土数も少ないことから、この段階の妻木晩田遺跡はまだ小規模な集落である。ただし、松尾頭地区では絵画土器や分銅形土製品などが認められ、時期は不確定であるが銅剣形石製品も出土している。松尾頭地区に祭祀空間を伴う集落があったのは間違いない。

後期になると、妻木晩田遺跡がこの地域の中心的な集落となる。後期前葉には、洞ノ原地区では、環壕や墳丘墓群が造られ、妻木新山地区や妻木山地区、松尾頭地区においても、数棟の竪穴住居からなる居住域が形成される。このうち、洞ノ原地区の洞ノ原1号墓、同2号墓は、米子市尾高浅山遺跡の四隅突出型墳丘墓と並び、大山北西麓最古の首長墓として位置づけられている。首長墓の登場と同時に、その後の大規模集落発展に繋がる居住域の形成が始まる点は重要である。後期中葉になると、洞ノ原地区の環壕は徐々に埋没し、墓域は仙谷墳丘墓群に移る。この頃から集落規模は拡大し、最盛



期を迎える後期後葉になると、丘陵全体に居住域が広がり、洞ノ原地区や松尾城地区にも分布が拡大する。仙谷墳丘墓群から松尾頭墳丘墓群に墓域が移り始める終末期前半には集落全体の竪穴住居跡数が一度減少するものの、その後回復し、集落は古墳時代前期前葉まで継続的に営まれる。

集落最終段階とも言える古墳時代前期初頭に築かれたのが、仙谷8号墓、同9号墓である。これら「晩田山」丘陵上に展開する首長墓と、妻木晩田遺跡から約1km離れた丘陵縁辺に位置し四隅突出型墳丘墓の可能性が指摘されている徳楽方墳（大山町長田）や、荘田2号墓（大山町荘田）との関係は、大規模弥生集落の最終段階の首長墓の系列を考える上で重要な検討課題である。

### 古墳時代

古墳時代前期中葉になると、妻木晩田遺跡の集落は急速に縮小し、その後の集落がどこに移ったの



第3図 妻木晩田遺跡周辺の遺跡

かは未だ明らかになっていない。

代わって「晩田山」丘陵上には多くの古墳が造営されるようになる。洞ノ原地区には晩田山古墳群、妻木山地区には番田山古墳群、妻木新山地区には妻木山古墳群、松尾頭地区には松尾頭古墳群がそれぞれ所在する。このうち、古墳群の形成が最も早いのは、洞ノ原地区の晩田山古墳群である。築造時期を明確に示す土器は出土していないが、前期に遡る古墳と考えられるのは、前方後円墳である晩田山3号墳のほか、方墳である晩田山11号墳、円墳の晩田山10・17号墳である。晩田山古墳群での最古相の古墳の様相を明らかにすることは、大規模弥生集落終焉後の集落と、当地域の古墳築造開始期の墓制の在り方を考える上で大変重要である。

中期から後期にかけて首長墓の系譜は、丘陵下に位置する小枝山古墳群、向山古墳群、富岡播磨洞

阿弥陀川右岸扇状地周辺の遺跡	47 国信第1遺跡	90 瓶山古墳群	壺瓶山～尾高丘陵周辺の遺跡
1 荒田遺跡	48 国信第2遺跡	Ka-1 瓶山4号墳	116 壺瓶山第4遺跡
2 山村遺跡	49 国信第3遺跡	91 福岡谷ノ上遺跡	117 壺瓶山古墳群
3 下大山第4(d)遺跡	50 唐王遺跡	92 向山古墳群	Tu-1 壺瓶山029号墳
4 富長第1遺跡	51 清原遺跡	Mu-1 向山1号墳	(大転場古墳)
5 下大山第2(a)遺跡	52 中高遺跡	(岩屋古墳)	118 福頼遺跡
6 下大山第3(b)遺跡	53 平古墳群	Mu-2 向山3号墳	119 大下畑遺跡
7 富長城跡	Ta-1 平6号墳(平狐塚)	Mu-3 向山4号墳	120 小波遺跡
8 富長第2遺跡	54 仁王堂遺跡	Mu-4 向山5号墳	121 百塚第1～7遺跡
9 古御堂遺跡	55 宮内古墳群	(長者ヶ平古墳)	122 百塚古墳群
10 古御堂曾利遺跡	Mi-1 宮内1号墳	93 小枝山古墳群	123 西小原遺跡
11 文珠領屋敷遺跡	Mi-2 宮内2号墳	Ko-1 小枝山4号墳	124 小波城跡(小浪城)
12 文珠領遺跡	56 宮内第3遺跡	(上ノ山古墳)	125 小波下原田遺跡
13 古御堂新林遺跡	57 末吉城跡	Ko-2 小枝山3号墳	126 小波上遺跡
14 古御堂金蔵ヶ平遺跡	58 末吉遺跡	Ko-3 小枝山5号墳	127 小波原畑遺跡
15 古御堂笹尾山遺跡	59 上万遺跡	(石馬谷古墳)	128 小波狭間谷遺跡
16 原遺跡	60 妻木法大神遺跡	Ko-4 小枝山6号墳	129 原田遺跡
17 茶畑第1遺跡	61 新田原遺跡	Ko-5 小枝山012号墳	130 泉上経前遺跡
18 茶畑山道遺跡	62 大道原遺跡	94 小枝山遺跡	131 泉中峰・泉前田遺跡
19 押平尾無遺跡	63 塚田遺跡	95 彼岸田遺跡	132 岡成古墳群
20 茶畑古墳群	64 庄田古墳群	96 稲吉遺跡	133 喜多原第5遺跡
21 茶畑第2遺跡	65 長田古墳群	97 城山古墳群	134 喜多原第1遺跡
22 大塚塚根遺跡	Na-1 長田014号墳	Si-1 城山010号墳	135 喜多原第2遺跡
23 大塚岩田遺跡	(徳楽墳丘墓)	(持給院古墳)	136 喜多原第3遺跡
24 大塚殿信遺跡	66 長田第3遺跡	98 稲吉古墳群	137 喜多原第4遺跡
25 大塚成仏遺跡	67 長田早稲田遺跡	99 四十九谷横穴墓群	138 岡成第1遺跡
26 大塚第4遺跡	68 長田玉谷遺跡	100 鮎ヶ口遺跡	139 岡成第9遺跡
27 道垣遺跡	69 長田的場遺跡	101 富繁渡り上り遺跡	140 岡成第2遺跡
28 茶畑六反田遺跡	70 長田大新田遺跡	102 河原田遺跡	141 岡成第7遺跡
29 茶畑本家遺跡	71 長田第5遺跡	103 稲吉角田遺跡	142 仲間古墳群
30 東高田遺跡	72 長田第8遺跡	104 高井谷遺跡	143 尾高古墳群
31 大塚第2遺跡	73 長田第9遺跡	105 高井谷古墳群	144 岡成第6遺跡
32 大塚三反田遺跡	74 長田大新田ノ二遺跡	Tak-1 高井谷5号墳	145 尾高御建山遺跡
33 大塚第3遺跡	75 香原山城(カヲ城)	106 井手挾遺跡	146 尾高泉原遺跡
34 大塚屋敷遺跡		107 井手挾古墳群	147 尾高城跡
35 押平上六反遺跡	淀江平野周辺の遺跡	Ide-1 井手挾3号墳	148 尾高遺跡
36 押平天王屋敷遺跡	76 安原遺跡	108 中西尾古墳群	
37 押平弘法堂遺跡	77 富岡播磨洞遺跡	Na-1 中西尾7号墳	
38 京ヶ坪遺跡	78 安原溝尻遺跡	(日吉塚古墳)	
39 西高田遺跡	79 今津岸の上遺跡	Na-2 中西尾5号墳	
40 高田古墳群	80 今津塚田遺跡	Na-3 中西尾3号墳	
Taka-1 高田26号墳	81 晩田遺跡	(長塚古墳)	
	82 楚利遺跡	109 高井谷東美谷古墳群	
阿弥陀川左岸扇状地周辺の遺跡	83 北尾宮廻遺跡	110 富繁流田遺跡	
41 福尾城跡	84 福岡北尾尻遺跡	111 富繁古墳群	
42 福尾第1遺跡	85 福岡柳谷遺跡	112 富繁城跡(亀山城)	
43 福尾第2遺跡	86 北尾城跡	113 西尾原横穴墓群	
44 上野第1遺跡	87 上淀麿寺跡	114 西尾原古墳群	
45 上野第3遺跡	88 福岡遺跡	115 福頼古墳群	
46 上野第2遺跡	89 淀江井手勝遺跡		



古墳群に移る。特に、向山古墳群は後期における伯耆最有力の首長系譜を形成する。この時期、妻木晩田遺跡の各古墳群では小規模な古墳の築造が続き、松尾頭地区では小規模な居住が認められる。その後、終末期になると、洞ノ原地区丘陵裾部において、出雲地域の影響を強く受けた切石積の横穴式石室をもつ晩田山1号墳、2号墳、31号墳が築造される。

また、中期後葉から後期にかけて「百塚遺跡群」を中心に大規模な集落が営まれる。付近には百塚古墳群があり、いわゆる群集墳と、それを造営した集団の居住域が確認されている点は注目される。

#### 古代・中世以降

飛鳥時代になると、小枝山古墳群や向山古墳群が位置する米子市淀江町字福岡に、彩色壁画の出土等で注目される上淀廃寺が建立される。奈良時代になると、妻木晩田遺跡松尾城地区、松尾頭地区に小規模な集落が認められる。平安時代以降には、洞ノ原地区において土師器や須恵器が少量出土するものの、この頃の集落の存在は明らかになっていない。中世には、松尾城地区に山城が築かれる。斜面地に確認できる地形には、この頃の土塁や曲輪状の遺構も含まれている可能性があるが、現況では判然としない。今後の発掘調査で明らかにしていく必要があるだろう。

#### 主要参考文献

岩田文章編 1997『妻木晩田遺跡 小真石清水地区発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 42、淀江町教育委員会

岩田文章編 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 50、淀江町教育委員会

君嶋俊行編 2008『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書－第16・19次調査－』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅲ集、鳥取県教育委員会

佐々木謙 1981『宇田川』、淀江町教育委員会

大山町誌編さん委員会編 1980『大山町誌』、大山町役場

大山町誌編集委員会編 2010『続大山町誌』、大山町

玉木秀幸編 2011『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書－第20・21・23次調査－』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅳ集、鳥取県教育委員会

津久井雅志 1984「大山火山の地質」『地質学雑誌』第90巻第9号、日本地質学会

中原斉 2001「分布調査について」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報2000』、鳥取県教育委員会

濱田竜彦編 2003『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書－洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査－』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅰ集、鳥取県教育委員会

馬路晃祥編 2006『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書－第8・11・13次調査－』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集、鳥取県教育委員会

松井潔 1996「山陰東部における後期弥生墓制の展開と画期」『考古学と遺跡の保護』甘粕健先生退官記念論集刊行会

松本哲他編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅳ』大山町埋蔵文化財調査報告書第17集、大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会

山口剛編 2000『大山町内遺跡発掘調査報告書』大山町教育委員会

淀江町誌編纂委員会編 1985『淀江町誌』、淀江町

## 第Ⅱ章 発掘調査に至る経緯

### 第1節 発掘調査の経緯

妻木晩田遺跡の第1次調査は、ゴルフ場開発を契機に平成7年に始まった。第1次調査では、当初は丘陵ごとに「洞ノ原遺跡」「妻木山遺跡」などの遺跡名を付し、別個の遺跡として認識、調査されていた。その後、丘陵頂部を中心に平成10年までに約17haにおよぶ調査がおこなわれ、弥生時代中期中葉から古墳時代前期及び後期の集落跡、古墳群、奈良時代の集落跡などが発見された（大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000、淀江町教育委員会2000）。特に、弥生時代後期から古墳時代前期には、丘陵の尾根上に居住域が展開し、約170haと推測される大規模な集落跡が形成されていたことが明らかになったことから、通称「晩田山」丘陵で確認された別個の遺跡を同一の遺跡群ととらえ、「妻木晩田遺跡群」と呼称されるようになった。

妻木晩田遺跡は、山陰地方の弥生時代集落を研究するうえで貴重な遺跡として平成11年に全面保存が決定し、約150haの範囲が国の史跡に指定された。史跡指定にあたり、遺跡全体をひとつの大きな集落遺跡として捉えるべきという観点から、遺跡名を「妻木晩田遺跡」と呼びかえることになった。なお、松尾頭地区と同一丘陵にある小真石清水遺跡については、平成5年から平成6年にかけて発掘調査が行われ、弥生時代後期後葉から終末期の竪穴住居跡が検出されている（淀江町教育委員会1997）。よって、妻木晩田遺跡と同一の集落と評価でき、松尾頭地区の一部として位置づけられている。

### 第2節 発掘調査の課題と計画

#### 1. 調査計画

鳥取県では、妻木晩田遺跡の全体像を明らかにするために、平成12（2000）年度から妻木晩田遺跡発掘調査委員会（現・とっとり弥生の王国調査整備活用委員会調査研究部会）の指導、助言のもと、計画的、継続的に発掘調査等の考古学的調査を実施している。平成12（2000）年度に発掘調査を実施するにあたり、はじめに以下の5つの調査課題を設定した。

- A 集落の構造と変遷に関する問題
- B 墓制に関する問題
- C 生活空間・生業に関する問題
- D 古環境に関する問題
- E 弥生時代以前、弥生時代以降の妻木晩田遺跡とその周辺に関する問題

また、平成14（2002）年度以降は、発掘調査をその方法と目的に応じて以下の①～③のように分類し実施することとした。

- ①重点調査：妻木晩田遺跡の詳細を明らかにするために行う特定地区を対象とする発掘調査。

長期計画、短期計画、及び内容確認調査の成果に基づき発掘調査を計画、実施する。

- ②内容確認調査：妻木晩田遺跡の全体像を把握することを目的に、史跡指定地内及びその周辺を含む広域を対象とした発掘調査。分布調査の成果に基づき内容を確認するためにトレンチ調査を実施する。

③分布調査：妻木晩田遺跡の全体像を現況から把握することを目的に、史跡指定地内及びその周辺を対象とした踏査を実施する。

これらの調査がそれぞれ関連性をもつように発掘調査年次計画を第1表のとおり定め、調査研究課題の解決を図っている。これまでの発掘調査の一覧は第2表のとおりである。

## 2. 長期計画第Ⅰ期の概要

平成12年から平成21年までの10年間を長期計画第Ⅰ期とし、重点調査については、調査課題Aを中心に、課題C・Dの解明を目指して調査を実施した。

### 短期計画第1期

平成12年度、平成13年度の2年間は短期計画第1期とし、「形成期の集落像の解明」を目的として、洞ノ原地区西側丘陵の環壕とその内部空間の在り方を明らかにするために重点調査をおこなった。その結果、環壕が機能していた後期前葉には内部空間に居住に関わる建物は認められないこと、後期中葉以降に環壕は埋没が進み、集落最盛期にあたる後期後葉に洞ノ原西側丘陵は居住域へ変遷することが明らかになった（鳥取県教育委員会2003）。

### 短期計画第2期

続く平成14年から平成16年度までの3年間は短期計画第2期とし、「最盛期の集落像の解明」を目的として妻木山地区で重点調査をおこなった。その結果、最盛期となる後期後葉の集落は、3棟前後の竪穴住居を1単位とする居住単位が丘陵頂部の縁辺部に分布し、これらのまともりは廃絶と建て替えを行いながら2～3段階にわたり変遷していたことが明らかになった（鳥取県教育委員会2006）。内容確認調査は、平成15年度に、妻木山地区と妻木新山地区を結ぶ丘陵鞍部で、旧地形の復元と居住域の分布を確認するためのトレンチ調査をおこない（鳥取県教育委員会2004）、平成16年には、松尾頭地区及び妻木山地区で斜面地の遺構分布を把握するためにトレンチ調査をおこなった（鳥取県教育委員会2005）。

### 短期計画第3期

平成17年度、平成18年度の2年間は、短期計画第3期とし、「首長層居住域の実態解明」を目的として松尾頭地区で重点調査をおこなった。特に妻木晩田遺跡では唯一庇付きの構造をもつ大型庇付掘立柱建物跡（第41建物跡）を取り巻く遺構の分布状況と時期を明らかにすることを目的として調査を進めた。その結果、第41建物跡は、同時期に存在した竪穴住居の居住単位に含まれ、区画溝などの施設を伴わない形で存在していたことが明らかになった。第41建物跡を含む竪穴住居群は、大型竪穴住居や青銅鏡などの首長の存在を直接示すような遺構・遺物は認められないが、第41建物跡の北西に位置する第53竪穴住居跡からは21点の鉄製品が出土し、鉄製品を多く保有する竪穴住居群であったことが明らかになった（鳥取県教育委員会2008）。内容確認調査は、遺構の分布状況を把握するために、松尾頭地区・松尾城地区・妻木新山地区においてトレンチ調査をおこなった（鳥取県教育委員会2006、鳥取県教育委員会2007）。

短期計画第3期の調査成果をうけ、大型掘立柱建物と、大型竪穴住居を含む居住単位との関係を明らかにすること、旧小真石清水遺跡を含む松尾頭地区全体の集落構造を明らかにすることが、「首長層居住域」である松尾頭地区の構造を解明するために必要と考えられたことから、第Ⅰ期計画を延長して、新たに短期計画第4期を策定し、松尾頭地区の発掘調査を継続することが決定した。

### 短期計画第4期

平成19年度から平成21年度までの3年間を短期計画第4期とし、「松尾頭地区の集落像の解明」を目的とする重点調査を行った。第1次調査において、松尾頭地区では最盛期となる後期後葉に床面積30㎡を超える大型竪穴住居群が検出され、周囲に庇付きの大型掘立柱建物が確認されたことから、松尾頭地区の中心的な役割を果たす居住単位と考えられてきた。短期計画第4期の重点調査によって、大型掘立柱建物を含む周囲の居住単位の在り方を確認した結果、これらの居住単位では鉄製品やガラス製品などを保有する傾向にあることが明らかになったが、新たな大型竪穴住居は確認されなかった。仙谷墳丘墓群から松尾頭墳丘墓群に墓域が変遷する終末期後半には、大型竪穴住居の立地が東に移り、松尾頭地区の中心が同一丘陵の東側へ移動したことが明らかになった（鳥取県教育委員会2011a）。

### 3. 長期計画第Ⅱ期の概要

長期計画第Ⅱ期は、平成22年度から平成30年度までの8年間とし、調査課題Bを中心に、課題C、課題Dの解明を目指した。妻木晩田遺跡の墓域については、集落最盛期の墳丘墓や、墳丘をもたない土壙墓・木棺墓群の有無の確認など課題が多く残されているなか、墳丘墓群周辺の分布調査や内容確認調査によって、未確認の墳丘墓の存在が明らかとなり、既知の墳丘墓群の中での位置づけを確認するために、各墳丘墓群において重点調査を実施した。

#### 短期計画第1期

平成22年から平成27年度までの5年間を短期計画第1期とし、「墳墓域の実態解明」を調査課題として仙谷墳丘墓群の重点調査を行った（鳥取県教育委員会2011b～2016）。仙谷墳丘墓群は、1次調査において妻木晩田遺跡最大の四隅突出型墳丘墓である仙谷1号墓や後期中葉～終末期の2～7号墓が知られているが、分布調査によって未調査地に段状の地形や高まり、平坦な地形などが認められ、さらに墓域が広がることが想定された（鳥取県教育委員会2006b）。そこで、仙谷墳丘墓群の範囲及び帰属する墳丘墓の構造と築造時期、妻木晩田遺跡における弥生時代後半期の墓域と居住域との関係を明らかにすることを目的として調査した結果、新たに古墳時代前期前葉で石棺の埋葬施設を持つ仙谷8号墓と円形に地山を削り出した9号墓を検出し、新しい葬送儀礼を取り入れながら、集落終焉期まで仙谷丘陵において墳丘墓の築造があったことが明らかとなった。

#### 短期計画第2期

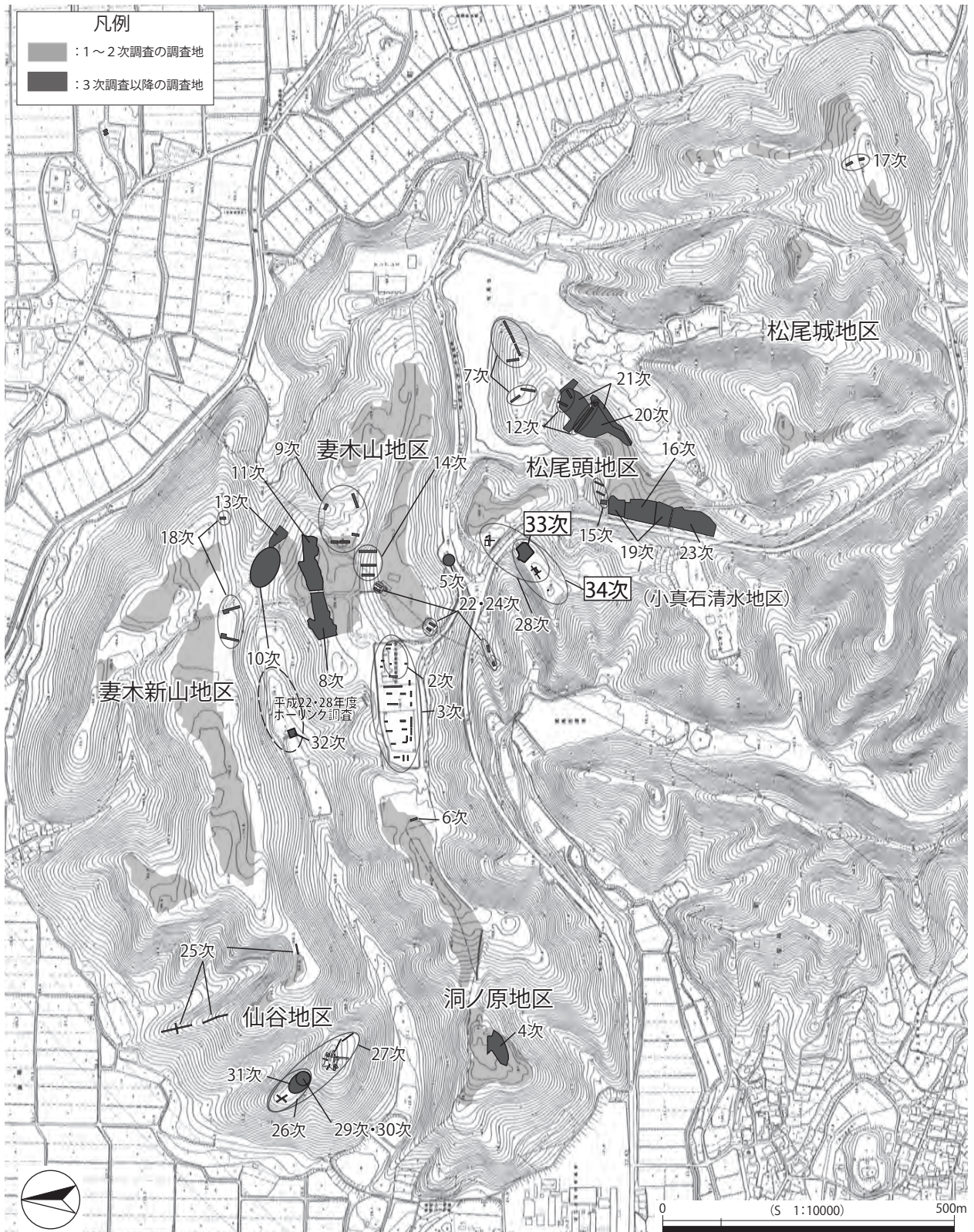
平成29年から平成30年度までの2年間を短期計画第2期とし、「墳墓域の実態解明」を調査課題として松尾頭墳丘墓群の重点調査を行った（鳥取県教育委員会2018、2019）。松尾頭墳丘墓群は、第1次調査時に2基の墳丘墓が確認されており、弥生時代終末期における墓域と推測された場所である（大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会2000）。平成25年度に、未調査地である墓域西側の様相を把握するための内容確認調査を実施したところ、同一丘陵上に終末期の墳丘墓を確認し、墓域が西へ展開することが明らかになった（鳥取県教育委員会2014）。そこで、松尾頭墳丘墓群の範囲及び帰属する墳丘墓の構造と築造時期、埋葬施設の構造を確認すること、墓域と居住域との関係を明らかにすることを目的として、松尾頭10区東側を平成29年度（第33次）、10区全体を平成30年度（第34次）に重点調査を行うことが決定した。



第1表 妻木晩田遺跡発掘調査年次計画

年次	重点調査		内容確認調査	分布調査	報告書
	調査課題	調査地			
H12	形成期の集落像の解明	洞ノ原地区西側丘陵	初期整備に伴う確認調査	全域	
H13				松尾頭地区	
H14	最盛期の集落像の解明	妻木山地区	妻木山地区	妻木山地区	洞ノ原
H15			妻木山地区	松尾頭地区・松尾城地区	
H16			松尾頭地区	妻木新山地区	
H17	首長層居住域の実態解明	松尾頭地区（4～6区）	松尾頭・松尾城地区	仙谷地区	妻木山
H18			妻木新山地区		
H19	松尾頭地区の集落像の解明	松尾頭地区（7区）			松尾頭
H20		松尾頭地区（8区）			
H21		松尾頭地区（9区）			
H22	墳墓域の実態解明	仙谷地区東側丘陵			松尾頭
H23		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓ほか）			
H24		仙谷地区西側丘陵（仙谷1号墓・8号墓ほか）			
H25		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓）	松尾頭地区1区・10区		
H26		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓）			
H27		仙谷地区西側丘陵（仙谷8号墓・9号墓）			
H28			妻木山地区谷部の内容確認調査／谷部のポーリング調査		仙谷
H29		松尾頭10区東			
H30		松尾頭10区（全体）			
R1		出現期、展開期における集落像の解明	妻木新山地区		
R2					
R3以降	※調査成果を踏まえて調査地を検討し、継続的に発掘調査を実施。				妻木新山
※令和3年度以降は予定					





第4図 妻木晩田遺跡発掘調査区位置図



第2表 妻木晩田遺跡発掘調査一覧

次数	調査区	目的	期間(S:昭和 H:平成)	面積(m <sup>2</sup> )	文献
	松尾頭遺跡	試掘調査	S52. 4.20 ~ S53. 3. 2	720.00	大山町教育委員会 1978
	松尾頭遺跡	記録保存	S53.12 ~ S54. 3		大山町教育委員会 1979
	妻木新山遺跡	試掘調査	H 4.10.21 ~ H 4.12. 8	302.00	大山町教育委員会 1993
	妻木新山遺跡(含仙谷1号墓)	試掘調査	H 4.12. 9 ~ H 5. 9. 1	432.00	大山町教育委員会 1994b
	妻木新山遺跡(含仙谷2・3号墓)、 妻木山遺跡、 松尾頭遺跡、 松尾城跡	試掘調査	H 5. 9. 2 ~ H 6. 1.11	1,252.75	大山町教育委員会 1994a
	小真石清水遺跡	試掘調査	H 5. 5.20 ~ H 5. 6. 4	226.00	淀江町教育委員会 1995
	小真石清水地区	記録保存	H 5. 7. 2 ~ H 5. 9.13	6,800.00	淀江町教育委員会 1997
	晩田遺跡群(洞ノ原地区)	試掘調査	H 5.10. 5 ~ H 6. 2.24	143.00	淀江町教育委員会 1995
	妻木山遺跡	試掘調査	H 6. 1.12 ~ H 6. 3.31	288.50	大山町教育委員会 1994b
1次	妻木新山地区、 仙谷地区 妻木山地区、 洞ノ原地区 松尾頭地区、 松尾城地区	記録保存 (現状保存)	H 7. 3. 5 ~ H10. 3.31	164,500.00	大山町教育委員会他 2000 淀江町教育委員会 2000
2次	仙谷地区 妻木山地区 洞ノ原地区	試掘調査	H11.11. 4 ~ H12. 2.14	411.50	大山町教育委員会他 2000 淀江町教育委員会 2000
3次	妻木山地区	試掘調査	H12. 4.24 ~ H12. 5.18	505.40	鳥取県教育委員会 2001
4次	洞ノ原地区	内容確認	H12. 7. 6 ~ H14.12.28	3,500.00	鳥取県教育委員会 2003b
5次	妻木山地区	試掘調査	H12.12. 4 ~ H13. 1.11	9.00	鳥取県教育委員会 2001
6次	洞ノ原地区	内容確認	H13. 2.19 ~ H13. 7.23	14.00	鳥取県教育委員会 2002
7次	松尾頭地区	試掘調査	H13. 2.19 ~ H13. 5.21	266.00	鳥取県教育委員会 2002
8次	妻木山地区	重点調査	H14. 6.14 ~ H15. 2.26	2,300.00	鳥取県教育委員会 2006b
9次	妻木山地区	内容確認調査	H14.10. 2 ~ H14.11.29	96.50	鳥取県教育委員会 2003a
10次	妻木山地区	内容確認調査	H15. 4.23 ~ H15.11.28	135.00	鳥取県教育委員会 2004
11次	妻木山地区	重点調査	H15. 5.15 ~ H15.12. 9	2,500.00	鳥取県教育委員会 2006b
12次	松尾頭地区	内容確認調査	H16. 4.23 ~ H16.11.28	270.00	鳥取県教育委員会 2005
13次	妻木山地区	重点調査	H16. 5.31 ~ H16.12. 9	1,200.00	鳥取県教育委員会 2006b
14次	妻木山地区	内容確認調査	H16.10. 1 ~ H16.12.21	190.00	鳥取県教育委員会 2005
15次	松尾頭地区	内容確認調査	H17. 4.26 ~ H17. 9.27	112.00	鳥取県教育委員会 2006a
16次	松尾頭地区	重点調査	H17. 5.25 ~ H17.12.23	1,100.00	鳥取県教育委員会 2008a
17次	松尾城地区	内容確認調査	H17.11.11 ~ H18. 3.17	34.00	鳥取県教育委員会 2006a
18次	妻木新山地区	内容確認調査	H18. 5.15 ~ H18.10.12	199.00	鳥取県教育委員会 2007
19次	松尾頭地区	重点調査	H18. 6. 6 ~ H19. 1.16	1,488.00	鳥取県教育委員会 2008a
20次	松尾頭地区	重点調査	H19. 6.20 ~ H19.12.27	2,350.00	鳥取県教育委員会 2011a

次数	調査区	目的	期間(S:昭和 H:平成)	面積(m <sup>2</sup> )	文献
21次	松尾頭地区	重点調査	H20. 5. 7 ~ H20.11.27	1,600.00	鳥取県教育委員会 2011a
22次	妻木山地区、 松尾頭地区	試掘調査	H20. 6.10 ~ H20.11. 4	40.00	鳥取県教育委員会 2009
23次	松尾頭地区	重点調査	H21. 4.20 ~ H21.10.30	2,100.00	鳥取県教育委員会 2011a
24次	妻木山地区 松尾頭地区	試掘調査	H21.10. 5 ~ H21.12. 2	73.00	鳥取県教育委員会 2011b
25次	仙谷地区	重点調査	H22. 4.16 ~ H22. 9.30	244.00	鳥取県教育委員会 2014/2017a
26次	仙谷地区	重点調査	H23. 4.15 ~ H23. 9.30	152.50	鳥取県教育委員会 2017a
27次	仙谷地区	重点調査	H24. 4.19 ~ H24.10.29	248.00	鳥取県教育委員会 2014/2017a
28次	松尾頭地区	内容確認調査	H25. 5.20 ~ H25.12. 9	144.30	鳥取県教育委員会 2014
29次	仙谷地区	重点調査	H25. 9.10 ~ H25.12. 9	204.80	鳥取県教育委員会 2017a
30次	仙谷地区	重点調査	H26. 7. 1 ~ H26.10. 8	832.00	鳥取県教育委員会 2017a
31次	仙谷地区	重点調査	H27. 7. 6 ~ H27.10.17		鳥取県教育委員会 2017a
32次	妻木山地区谷部	内容確認調査	H28.10. 3 ~ H28.12. 6	100.00	鳥取県教育委員会 2017b
33次	松尾頭地区	重点調査	H29. 8.23 ~ H29.12.17	600.00	鳥取県教育委員会 2018/2020
34次	松尾頭地区	重点調査	H30. 6.18 ~ H30.11.13	638.00	鳥取県教育委員会 2019/2020
			延べ調査面積	198,321.25	

妻木晩田遺跡 発掘調査関係文献

淀江町教育委員会 1997『妻木晩田遺跡 小真石清水地区発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 42

大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅳ』大山町埋蔵文化財発掘調査報告書 17

淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群発掘調査報告書』淀江町埋蔵文化財調査報告書 50

鳥取県教育委員会 2003『史跡妻木晩田遺跡第4次発掘調査報告書—洞ノ原地区西側丘陵の発掘調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅰ集

鳥取県教育委員会 2004『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2003』

鳥取県教育委員会 2005『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2004』

鳥取県教育委員会 2006a『史跡妻木晩田遺跡妻木山地区発掘調査報告書—第8・11・13次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅱ集

鳥取県教育委員会 2006b『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2005』

鳥取県教育委員会 2007『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2006』

鳥取県教育委員会 2008『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書—第16・19次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅲ集

鳥取県教育委員会 2011a『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書—第20・21・23次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅳ集

鳥取県教育委員会 2011b『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2010』

鳥取県教育委員会 2012『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2011』

鳥取県教育委員会 2013『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2012』

鳥取県教育委員会 2014『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2013』

鳥取県教育委員会 2015『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2014』

鳥取県教育委員会 2016『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2015』

鳥取県教育委員会 2017a『史跡妻木晩田遺跡仙谷墳丘墓群発掘調査報告書—第25・26・27・29・30・31次調査—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅴ集

鳥取県教育委員会 2017b『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2016』

鳥取県教育委員会 2018『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2017』

鳥取県教育委員会 2019『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2018』

鳥取県立むきばんだ史跡公園 2020『史跡妻木晩田遺跡松尾頭墳丘墓群発掘調査報告書—第33・34次発掘調査、墳丘墓群総括報告—』史跡妻木晩田遺跡発掘調査報告書第Ⅵ集（本書）

### 第3節 とっとり弥生の王国調査整備活用委員会調査研究部会（妻木晩田遺跡担当）の記録

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会（以下、委員会）は、鳥取県附属機関条例（平成25年10月11日公布鳥取県条例第53号）で定める鳥取県の附属機関である。当初の委員会は、妻木晩田遺跡発掘調査委員会として、平成11年度に「妻木晩田遺跡を解明するための学術的な発掘調査の方法や計画について、専門的に検討すること」を目的に設置された。

平成28年度には、「妻木晩田遺跡・青谷上寺地遺跡の学術的な発掘調査の方法・計画及び整備活用の方法・計画に関する事項」を検討することを目的に、青谷上寺地遺跡発掘調査委員会と統合、再編され、新たに「とっとり弥生の王国調査整備活用委員会」が発足した。委員会を構成する調査研究部会の妻木晩田遺跡担当には、当初の妻木晩田遺跡発掘調査委員会から継続する委員4名と、新たに加わる委員1名の計5名が委嘱され、調査の指導・助言にあたった。委員任期が満了する平成30年7月21日付けで、妻木晩田遺跡発掘調査委員会発足当初から委員長として妻木晩田遺跡の保存と調査に関わってきた渡邊貞幸委員長兼部会座長が退任し、和田晴吾副座長が新たな委員長兼部会座長に就任した。この時、部会委員5名のうち、渡邊座長を含めた2名の委員が交代し、新体制で調査の指導・助言に当たっている。

#### とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第1回）

開催日時 平成29年3月9日（木）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 渡邊貞幸（座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）、李 素妍（委員）  
米子市教育委員会 下高瑞哉（課長補佐） 大山町教育委員会 西尾秀道（室長）  
事務局 信組義彦（所長）、高尾浩司（係長）、長尾かおり、濱本利幸（以上、文化財主事）、  
君嶋俊行（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査担当 係長）、山柙雅美（文化財課歴史遺産室 室長）

内 容 妻木地区谷部の内容確認調査について報告を行なった。また、平成29年度の調査計画及び第Ⅲ期以降の調査計画（案）について議論がなされた。

#### とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第2回）

開催日時 平成29年9月29日（金）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 和田晴吾（副座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）、李 素妍（委員）  
事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司（係長）、家塚英詞（文化財主事）、濱田竜彦（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査整備担当 係長）、山柙雅美（文化財課歴史遺産室 室長）

内 容 第33次重点調査（松尾頭10区北東部）について、現地で調査経過の報告を行なった。マウンド状地形Bについて、墳丘墓の可能性が高まったことから第33次調査では周溝の調査と墳頂部の埋葬施設プランの精査が優先された。尾根から斜面部にかけての遺構の分布状況については平面精査により確認することとなった。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第3回）

開催日時 平成30年3月16日（金）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 渡邊貞幸（座長）、和田晴吾（副座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）、李 素妍（委員）

事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司、濱本利幸（以上、係長）、家塚英詞（文化財主事）、濱田竜彦（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査整備担当 係長）、山柘雅美（文化財課歴史遺産室 室長）

内 容 第33次重点調査（松尾頭10区北東部）について、報告を行った。マウンド状地形Bについて、「松尾頭3号墓」と呼称することが承認された。委員からは、松尾頭3号墓は「方形周溝墓」であり、用語は「周溝」と「陸橋」を使用するように指摘された。平成30年度実施の第34次発掘調査については、引き続き松尾頭10区北東部の松尾頭3号墓と斜面部の遺構分布状況、10区南西部のトレンチ調査を行うこととなったが、松尾頭3号墓の埋葬施設について優先的かつ慎重に調査することを念頭に、次回部会において調査方針を決定することとなった。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第4回）

開催日時 平成30年7月12日（木）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 渡邊貞幸（座長）、和田晴吾（副座長）、吉田 広（委員）、佐々木由香（委員）

事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司（係長）、梅村大輔、森藤徳子（以上、文化財主事）、濱田竜彦（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査整備担当 係長）、大野哲二（同、文化財主事兼係長）、君嶋敏行（文化財課歴史遺産室 係長）

内 容 第34次重点調査（松尾頭10区）について、現地で調査方針が検討された。松尾頭3号墓及び墳丘墓の可能性のあるマウンド状地形C～Eといった墳丘墓群の調査を優先的に行い、調査中に委員による現地指導を実施することで、調査の進捗に合わせて調査方法を変更する方針となった。7月20日に委員が改選となり、調査中の9月～10月にかけて、新委員を含めて現地指導を受け、松尾頭3号墓の調査方法の変更及びマウンド状地形C～Eの調査状況など承認を得ながら進めた。

とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会（妻木晩田遺跡担当 第5回）

開催日時 平成31年3月5日（火）

場 所 鳥取県立むきばんだ史跡公園

出席者 調査研究部会 和田晴吾（座長）、吉田 広（副座長）、佐々木由香（委員）、平郡達哉（委員）

大山町教育委員会 山口 剛（主幹兼文化財調査員）

事務局 黒田 真（所長）、高尾浩司、濱本利幸（以上、係長）、梅村大輔、森藤徳子（以上、文化財主事）、北浦弘人（埋蔵文化財センター青谷上寺地遺跡調査担当 課



長補佐)、大野哲二(同、文化財主事兼係長)、水村直人(文化財課歴史遺産室文化財主事)

内 容 第34次重点調査(松尾頭10区)について調査成果を報告し、マウンド状地形C・Dについて、それぞれ松尾頭4号墓・同5号墓と呼称することが承認された。委員からは、総括報告書刊行に向けて複数の課題が出され、用語などの整理を行ったうえで編集作業を行うこととなった。また、平成31年度(令和元年度)の調査計画について、妻木新山2区南側斜面部の内容確認調査を行うことを提案し、承認された。

## 第4節 とっとり弥生の王国調査整備活用委員会・調査体制

### とっとり弥生の王国調査整備活用委員会 調査研究部会 妻木晩田遺跡担当

平成28～30年度

座 長 渡邊貞幸(出雲弥生の森博物館 名誉館長)

副座長 和田晴吾(兵庫県立考古博物館 館長)

委 員 吉田 広(愛媛大学ミュージアム 准教授)

佐々木由香(株式会社パレオ・ラボ 総括部長/昭和女子大学 講師/明治大学黒耀石研究センター センター員)

李 素妍(鳥取大学准教授)

(職名は平成30年度時点のもの)

助言機関 文化庁文化財部記念物課、米子市教育委員会、大山町教育委員会

事 務 局 鳥取県立むきばんだ史跡公園

平成30～31年度(令和元年度)

座 長 和田晴吾(兵庫県立考古博物館 館長)

副座長 吉田 広(愛媛大学ミュージアム 准教授)

委 員 松本直子(岡山大学大学院 教授)

平郡達哉(鳥根大学 准教授)

佐々木由香(明治大学黒耀石研究センター 客員研究員/昭和女子大学 講師)

(職名は令和元年度時点のもの)

### 調査主体

平成28年度

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長 信組 義彦

総務担当

係 長 大塚 義喜

主 事 齊木 敦

調査活用担当

係 長 高尾 浩司(総括) 塚田 浩



文化財主事	長尾 かおり (調査担当)	濱本 利幸 (副査)
	潮 純一	
主 事	齋藤 恵	

平成 29 年度

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長	黒田 真	
次 長 (兼係長)	黒見 恵子 (総務担当)	
総務担当		
主 事	齊木 敦	
調査活用担当		
係 長	高尾 浩司 (総括)	濱本 利幸
文化財主事	家塚 英詞 (調査担当)	
	潮 純一	荊尾 郷
主 事	齋藤 恵	

平成 30 年度

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長	黒田 真	
次 長 (兼係長)	黒見 恵子 (総務担当)	
総務担当		
主 事	齊木 敦	
調査活用担当		
係 長	高尾 浩司 (総括)	濱本 利幸
文化財主事	森藤 徳子 (調査担当)	梅村 大輔 (副査)
	潮 純一	荊尾 郷

平成 31 年度 (令和元年度) (報告書作成)

鳥取県立むきばんだ史跡公園

所 長	黒田 真		
調査活用担当			
係 長	高尾 浩司 (総括)	濱本 利幸	本池 優子
文化財主事	森藤 徳子 (調査担当・報告書作成担当)	梅村 大輔 (副査)	
	荊尾 郷	枅家 豊	